

# メアリ・シェリーの『マチルダ』と 草稿原稿『夢幻の原』 —研究ノートとして

池 田 景 子

## 1. イントロダクション

中編小説『マチルダ』(*Matilda*) はメアリ・シェリー (Mary Shelley) の処女作『フランケンシュタイン』(*Frankenstein*) に続いて執筆された、2 番目の小説である。本稿ではこの作品の執筆背景を概観し、草稿原稿が別タイトルで存在することを紹介する。従来批評家は、『マチルダ』におけるメアリの自伝的要素に着目して作品解釈を行ってきた。その例としてエリザベス・ニッチ (Elizabeth Nitchie) の「メアリ・シェリーの『マチルダ』—未完の物語とその伝記的意義」(“Mary Shelley’s *Mathilda*: An Unpublished Story and Its Significance”) に代表される批評が挙げられる。その後、批評は本作品にメアリの自伝的要素が部分的に含まれていることを踏まえつつ、作品がフィクションであることを認め、語りの手法や近親相姦を扱う他の作品との比較からメアリの作家として独自性を分析するものなど、多岐に渡る<sup>1</sup>。このような批評の流れの中で、批評家は『マチルダ』以前の草稿として『夢幻の原』が存在することに注意を払ってきたが、両者を比較する議論は論考の一部であることが多く、まだ十分とは言えない感が否めない。本研究ノートでは、本作品執筆時のメアリの伝記的背景、草稿原稿である『夢幻の原』を加筆修正して『マチルダ』へと至るプロセス、『マチルダ』に対する周囲の反応を簡単に整理する。次に、『夢

『夢幻の原』から『マチルダ』への変更箇所を確認するために、『マチルダ』の梗概を紹介した後、草稿原稿の変更箇所、特に各作品に設定されている枠物語の違いを比較することで、作品の基本的理解を深めていく。作品の理解における基本的前提をまとめているという点で、本稿はあくまでも研究ノートといった位置づけであり、通常の論考とは異なることを申し添えておきたい。

## 2. 作品について一草案原稿と改訂版原稿

1819年8月4日から9月12日にかけて、メアリはイタリアでこの『マチルダ』の草案原稿となる『夢幻の原』(*The Fields of Fancy*)を執筆する。草稿原稿に付されたタイトルや草稿原稿の冒頭に設定されている枠物語の教訓的内容から、メアリの母ウルストンクラフトの『夢幻の洞窟』(*The Cave of Fancy*)からの影響が指摘されている<sup>2</sup>。ただし、『夢幻の原』における枠物語には、ソクラテスの導師、ディオティマ(Diotima)が登場する点や彼女が説く善悪の問題、魂の旅といったモチーフなどが見受けられる点から、プラトン及びダンテの影響であるとの指摘もあり、物語の教訓性についてもゴドウィンの小説との類似を読み取る批評家もいる<sup>3</sup>。このように草案原稿はメアリの当時の読書経験が反映された枠物語を包含していたが、この冒頭の章を中心に草稿原稿には1819年11月9日までに加筆・修正が施され、作品のタイトルも主人公の名にちなんだ『マチルダ』に変更される。作品の執筆時期に注意を向けると、それはメアリにとって子どもの死と新たな誕生を体験した狭間であり、気持ちに大きな揺れがあったと言える。1819年に6月7日に長男ウィリアム(William)が亡くなり、その悲しみに打ちひしがれたメアリ自身がうつ状態になって、夫P. B. シェリー(P. B. Shelley)との仲も冷えこんだ。メアリが1814年7月28日から続けていた日誌も、同年6月4日から2か月程度中断している。その後、日誌はパーシーの誕生日である8月4日から再開され、その日の記載内容に『夢幻の原』の起稿が見られる(*Journal* 294)。また、後になってメアリは日誌の

中で作品執筆当時を振り返り、次のように述懐する。「以前、マチルダを執筆した際には苦悩に満ちていたが、インスピレーションが沸いて仮初にもその苦悩を消してくれた」(“Before when I wrote Matilda, miserable as I was, the inspiration was sufficient to quell my wretchedness temporarily”[*Journal* 442])、と。つまり、本作品の執筆はメアリの生きる気力を取り戻し始めた時期でもあり、『マチルダ』執筆からその気力回復を図ったことになる。さらに、11月9日フィレンツェにて原稿が完成し、同年11月12日にその誕生地であるフィレンツェにちなんで名づけられた次男パーシー・フロレンス(Percy Florence)が誕生する。

修正版の原稿とも言える『マチルダ』はメアリの父ウィリアム・ゴドウィン(Willaim Godwin)に送付された。メアリがゴドウィンの反対を押し切り、妻子持ちのシェリーと駆け落ちしたことから、メアリとゴドウィンの仲は冷えていた。シェリー夫妻がイタリアに出奔した当時はすでにシェリーの最初の妻ハリエット(Harriet)が自殺し、メアリと正式に結婚をしている。しかし、ゴドウィンとシェリー夫妻の間柄は良好とはいえないものだった。一方で、メアリはゴドウィンの経済苦を見かねて、『マチルダ』の原稿をゴドウィンに渡してイギリスで出版してもらうことで、父親の家計の足しにならないかと考えたようだった。シェリー夫妻はウィリアムの死後、ローマを離れてリヴォルノのヴァルソヴァーノ荘(Villa Valsovano)に居を構える。このとき夫妻はギズボーン夫妻(The Gisbornes)と交流を持つ。特に息子を亡くしたシェリー夫妻にとってこの交流が慰めとなった。1820年5月にギズボーン夫妻がイタリアからイギリスへ船で帰る折、メアリはマライア・ギズボーン(Maria Gisborne)に本作品の原稿を渡す。原稿はマライア経由でゴドウィンの手に渡った。マライアは帰国途中の船上で、メアリの原稿を読み、その作品のみならずメアリの作家としての才能も同時に絶賛する。

I have read “Mathilda”. This most singularly interesting novel evinces the

highest powers of mind in the author united to extreme delicacy of sentiment. It is written without artifice and perhaps without the technical excellence of a veteran writer – There are perhaps some little inaccuracies which, upon revisal, might have been corrected: but these are trifling blemishes and I am well persuaded that the author will one day be admiration of the world. I am confident that I should have formed this opinion had I not been acquainted with her and loved her. (27)

マライアはメアリの『マチルダ』に太鼓判を押すが、原稿を受け取ったゴドウィンは以下のような批判をしていたとマライアは日誌に記録している。

Mr. G spoke of *Mathilda*; he thinks very highly of some of the parts; he does not approve of the fathers letter, because the daughter would not be authorized by it to order the carriage (a strange reason) as she does; the description on the part of the father with regard to his real design is too complete; for himself he says he should most certainly not have ordered a carriage to be prepared for the pursuit, after receiving such a letter. The pursuit however (and I *add* the catastrophe which closes it) he thinks the finest part of the whole novel. The subject he says is disgusting and detestable; and there ought to be, at least if it is ever published, a preface to prepare the minds of the readers, and to prevent them from being tormented by the apprehension from moment to moment of the fall of the heroine; it is true (he says) that this difficulty is in some measure obviated, by Mathildas protection at the beginning of the book, that she is apt to lose sight of that protestation; besides (he added with animation) one cannot exactly trust to what an author of the modern school may deem guilt. (43-44)

ゴドウィン『マチルダ』におけるいくつかの点を評価しつつも、次の2点を批判している。まず1点目は、自殺を決意した父が最後にマチルダに宛てて書いた手紙である。物語では、マチルダは手紙の行間から父の尋常ならざる決意を読み取り、その後を追跡するため馬車の準備を執事に言いつける筋書きとなっている。しかし、ゴドウィンに言わせれば、父は手紙でマチルダに後を追うなど言っているのだから、この手紙を読んだだけでマチルダが父を追跡するに至るのは不自然だという。第二に彼が批判の矛先を向けたのは、この作品の主題である。この主題とは、父と娘の近親相姦のことを指しているが、ここでゴドウィンが嫌悪感を隠し切れずに問題視しているのは作品後半で描かれるマチルダの罪悪感である。父親が娘のマチルダに抱いた近親相姦の感情は2人の肉体関係には繋がっていない。この点で、メアリの『マチルダ』はシェリーの『チェンチー族』(*The Cenci*)、オウィディウス(Ovid)の『変身物語』(*Metamorphoses*)、イタリアの作家アルフィエリ(Vittorio Alfieri)の『ミュラ』(*Myrrha*)などで扱われる父と娘の近親相姦とは一線を画しており、ここにメアリのオリジナリティを読み取ることも可能である。しかし、そのメアリのオリジナリティに関わる側面がゴドウィンの批判を受けているのだ。メアリの作品の中で、父親は娘に近親相姦の感情を抱いたことに絶望して自ら命を絶つ。父親からその気持ちを聞き出してしまったマチルダは、父親の自殺に責任を感じ、罪の意識から免れることはできず、絶望の中で生に意味を見出せず死を希求するようになる。このようなマチルダの罪の意識や絶望感をゴドウィンは過剰と解釈し、これが読者の心証を悪くすると言うのである。

マライアの日誌によると、ゴドウィンは作品のすべてをけなしていたわけではなく、マチルダが父親を追跡する場面は作品中のハイライトであると評価している。しかし、ゴドウィンはこの作品の出版を認めず、メアリから原稿の返却を求められても応じることはなく、ゴドウィンが亡くなる1836年までその手元に残されたままだった。このあたりの事情として、ゴドウィンは父と娘の近親相姦を扱った『マチルダ』を出版するのを父親として賛成できなかったの

だろうと推測できる。メアリが『マチルダ』を執筆した同じ頃、P. B. シェリーがジョン・ギズボーンから提供されたローマのベアトリーチェ・チェンチとその一族にまつわる実話をもとに、近親相姦と父親殺しをテーマに詩劇『チェンチ一族』を執筆する。この作品は当初 P.B. シェリーがメアリに執筆するように勧めたが、メアリは自分の「無能さ (incompetence)」を感じ、代わりに夫に執筆してほしいと依頼する (“Notes on *The Cenci*” 283)。この詩劇は出版され、第2版まで増版されるも、当時の雑誌からは作品のテーマが酷評されている<sup>4</sup>。このような背景もゴドウィンが『マチルダ』出版に賛成できなかった理由のひとつに数えることもできるだろう。このような事情から、ようやく『マチルダ』が日の目を見たのは1959年で、ニッチによって編集されたものが出版されたのである。

### 3. 『マチルダ』の梗概

小説『マチルダ』の梗概は以下のとおりである。物語は主人公であり、マチルダが死を前にして自分の人生をつづる手記を執筆している場面から始まる。まず、マチルダの両親の生い立ちとふたりが結婚に至るまでの話が簡単に述べられる。マチルダの父と母ダイアナは幼なじみである。マチルダの父にとってダイアナは良き導き手であり、ふたりは幸福な結婚生活を送っていたが、マチルダが生まれるとダイアナは亡くなる。マチルダの父は深く悲しみ、マチルダを伯母のもとに預けて放浪の旅に出る。父の命により、マチルダは伯母とともにスコットランドで過ごすためイングランドをでる。伯母は悪い人間ではなかったが、非社交的な人物であり、マチルダは寂しい思いを抱えながら少女時代を過ごすことになる。特に、気立てのよい乳母が出て行ってから、マチルダにとって自然の中で戯れることと、読書や音楽に多くの時間を過ごすことになる。読書によって想像力がはぐくまれて、マチルダは空想の中で父に再開する日を何度も夢見る。そして、マチルダが16歳になったとき、父がマチルダ

のもとへやってくる。父との再会を果たしてマチルダの世界は一気に開花する。マチルダの父も旅に出てダイアナの死を乗り越えて娘との再会を喜ぶ。そんな折、伯母が亡くなり、マチルダは父とともにロンドンへ戻る。ロンドンでふたりは幸せな時間を過ごす。ところが、マチルダの家にある若い男性が訪問するようになると、父の様子と態度に変化が見られるようになる。さらに、この若い男性があるときを境に訪問をばったりやめてしまう。その時以来、父のマチルダに対する態度が冷たくなる。マチルダは父が急に態度を変えたことに戸惑い、理由を考える。父に秘密の恋人でもできたのではとマチルダは憶測する。

再会から1年経ったあるとき、マチルダは父を散歩に誘う。森を散策しながら、父の変化についてマチルダは理由を教えてほしいと父に懇願する。理由を述べることを拒む父に対して、マチルダは理由を聞かせてほしいとせがみ、とうとう父は心に秘めた思いを口にしてしまう。自分が娘を愛している、と。マチルダの父は自分の言ったことの重みに耐えきれず、気を失う。父の不自然な愛を認識したマチルダは恐怖のあまり父を放り出して、家に逃げ帰る。その晩、父は置手紙を残して家を出る。翌朝、マチルダは死を予告する父の手紙を読んで、父の後を追う。執事とともに嵐の中、父を追跡するが、甲斐なく父は海に入水自殺した後だった。マチルダは体調を崩して生死の境をさまようが、回復する。しかし、父を死に追いやったという罪悪感はぬぐえず、マチルダは精神的な打撃から回復できない。孤独を求めて後見人のもとを去り、イングランド北部で隠遁生活を送るようになる。孤独の生活の中で、詩人のウッドヴィルと友人になる。ウッドヴィルも婚約者のエリナ（Elinor）を亡くして大きな悲しみを抱えていたが、前向きに生きていた。彼はマチルダを励ましに来た。しかし、社会から離れて暮らす時間が長くなるにつれてマチルダの中には利己的な性質が大きくなっていく。あるとき雨のせいでウッドヴィルが約束の時間に現われることができなかった。マチルダはやってきたウッドヴィルに自殺をしようと提案する。しかし、ウッドヴィルは辛抱強くマチルダを説得して、希望をもって生きることを意味を見出すべきだと言う。ウッドヴィルに説得され、マ

チルダも自殺を思いとどまる。ある日、ウッドヴィルは病の母親のもとへかけつけることになった。彼の出発を見送ったマチルダは帰途につくはずが、空想に浸りながら森を歩いていると道に迷ってしまう。歩き疲れたマチルダは森の中で眠りにつく。目が覚めた時には雨が降っていた。びしょぬれになって家にかえりつくが、この日を境にマチルダは寝込むようになる。いよいよ死期が近づいてきた。父との再会を夢に見るマチルダは喜びと希望に満ちて手記を終える。

#### 4. 『マチルダ』と『夢幻の原』の相違点

すでに述べたように、『マチルダ』は草案原稿『夢幻の原』を加筆・修正したものである。メアリはいくつか修正を施しているが、大きな変更点は枠物語の設定である。『マチルダ』において、主人公が自分の人生を手記に記載する設定となっており、枠物語においても本体の物語においても語り手は一人称の語り手であり、主人公のマチルダ本人である。つまり、死を前にしたマチルダが自分の人生を振り返ってその悲劇を執筆するため、物語の視点はマチルダからのものに限定され、この物語がマチルダによる自作自演のドラマではないかという読みを可能にしている側面はある。一方で『夢幻の原』においては、冒頭の章に登場する一人称の語り手は名前を付与されていないが、マチルダではない。舞台も『マチルダ』においてはイギリス及び、スコットランドに限定されている一方で、『夢幻の原』では冒頭の第一文から「ローマでのことだった (It was in Rome)」で始まり、語り手〈私〉は愛する者を亡くして絶望に苦しむ場面から物語の幕が切られている (351)。ローマで長男を亡くし、その約2か月後に本作品の執筆を始めたメアリの伝記的背景を考慮すると、ここでの語り手はむしろメアリ自身を想起させる<sup>5</sup>。『マチルダ』における主人公にメアリの伝記的要素を読み込むことは可能であるが、『夢幻の原』の場合、冒頭の章に登場する語り手の存在ゆえに、メアリとマチルダの間に距離ができてし



まうとも言える<sup>6</sup>。『夢幻の原』では、この＜私＞のもとへファンタジア (Fantasia) という名の精霊がやって来る。ファンタジアは＜私＞の愛する者と呼び戻すことはできないが、その悲しみを幾分か和らげることができると言い、エリュシオンへ誘う。しかし、ファンタジアについていけば、＜私＞は愛する者に思いを馳せることはできなくなる。たとえ辛くても彼らの記憶が自分のすべてなのに、と＜私＞はファンタジアの誘いに乗らない。その後ファンタジアは何度も＜私＞を誘いに来るが、「私」はその誘いを断った。

ある日二人がいつもと同じように、エリュシオンへの誘いとその誘いへの断りといった綱引きをした後、＜私＞はチベルの川岸を散策し、その散策途中で疲労感から眠気を催して木陰で眠りに落ちる。目が覚めたときには＜私＞はいつの間にか知らない場所にいた。ファンタジアがいて「この安寧な園に住む人々を何人か紹介しましょう」(“I will introduce you to some of the inhabitants of these peaceful Gardens”) と言う (353)。ファンタジアによると、このエリュシオンの園に住む人は、「此岸において勤勉や行動によって賢く美德を備えたいと願っていた」(“in your world wished to become wise & virtuous by study & action”) のでエリュシオンの園でも同じ目的から瞑想を行い自己鍛錬に励んでいる、という (353)。それゆえ、彼らはまだその究極の目的地にはたどり着いていないものの、自分の幸福は知的向上によるものだと認識しており、この世界について研究するだけでなく、己の心の中を追究してアテネの哲学者が好んで扱った高尚な主題について語り合っている、とも。彼らはこの園にくるまでに何年も時間がかかったが、機が熟せば彼らも別の世界へ旅立ち、賢さをほぼ無限に備えた者として受け入れられるのである。ファンタジアからこのような話を聞きながら＜私＞が歩いていると、人々が瞑想に耽ったり対話を交わしている様子が目に入って来た。さらに、このような人々を先導する女性の姿があった。歳は40くらいで名はディオティマという。このディオティマは預言者であり、ソクラテスの導師である。彼女に付き従う者たちは地上からこの園に来たばかりで、ディオティマに真理と叡智を教えてもらい、時

が来ればあの世へと旅立つことができるのである。ディオティマは泉のそばに腰を下ろし、「私」には気も留めず、人々に叡智を授けようとする。その中には23歳くらいの女性の姿もあった。その女性は大変美しかったが、物思いに沈んで幸薄い様子だった。この女性のそばには若い男性の姿もあった。

ディオティマの教えによると、善悪の区別をして善に重きを置くにはひと手間かかる、という。なぜなら此岸において善悪は複雑に絡み合っており、一見悪に見えるものを切り捨てればそこに多くの善が含まれており、無駄骨となることもあるからである。ディオティマが此岸にいる折、夜の一人歩きの中で自然の美しさに心打たれ、魂の高揚を感じた。彼女はそこに「世界の真理と秘密」

（“the truth & secret of the universe”）を見たような気がしたが、帰宅すると悪が支配する世界、人間の卑しい感情に思いを馳せた（356）。だが、最終的には瞑想が唯一ディオティマの心を落ち着かせてくれたのだった。自らの心の中を見直せば、自身に備わった美德があふれているのを発見できると、彼女は考えた。さらに、心の中を覗いて美への愛を見つける方法を是非とも他の者たちに伝えたい、と彼女は考えるようになった。それゆえ、今日の前にいる若者たちにも真理を会得して天上の美と一体になってほしいと言う。ふたりの若者はディオティマの教えを黙って聞いていたが、女性のため息でその沈黙が破られた。知が私たちの目指すところだとすると、なにゆえ私たちに情念や感情が与えられ、叡智から利己的な苦悩へ駆り立てられることになるのでしょうか。地上で私はこの試練を全うし、最期の時は自分に非がないと思うことで心が落ち着きましたのに、あなたの話を聞くと私の心は落ち着きません、と。あなたの心は苦しみにによって壊れているのです、というのがディオティマの答えだった。そして、あなたの心を苦しませているものを話してほしいと、ディオティマは言う。すると、女性は「暗く麻痺した情念」（“dark & phrenzied passions”）について語らなければならないと答える（359）。ディオティマの魂が此岸において交流したのは愛だけで、その他の感情については無知であるため、そんな話をしても共感を得られるだろうか、と女性は不安を覗かせる。ちょうどそ

のとき、ファンタジアの姿が視界から薄らいでいき、＜私＞はチベルの川岸にある木陰にいた。日没前だった。＜私＞は立ち上がり、悲しみを胸にローマの市街へ足に向けた。翌日も＜私＞はファンタジアに連れられて園を訪れた。件の女性は＜私＞が来るのを待っており、地上での自分の身の上話を始める。この女性の名がマチルダであり、その身の上話はマチルダによる一人称の語りによって進められる。

『夢幻の原』において冒頭の章はローマで愛する者を亡くし悲しみにひたる＜私＞によって語りが進められ、第2章においてマチルダによる自身の身の上話へとシフトする。このため、一人称の語り手は1章と2章で別人物を指すことになる。第2章以降で語られるマチルダの物語の内容は、細かな表現上の違いを除けば、ほぼ『マチルダ』において語られる身の上話と同じである。しいて言えば、物語後半でマチルダを励ます友人として登場するウッドヴィルは、『夢幻の原』においてはラヴェル (Lovel) と命名されている。また、物語の結びにおいても、冒頭の杵物語が大幅に変更されているため、多少の変更が見られる。『マチルダ』において物語は主人公の手記という体裁を取っている都合上、語り手であるマチルダが自分は亡くなったとは言えない。自身が亡くなることや亡くなった後の墓の様子を予測しながら、手記を渡す予定のウッドヴィルに別れの言葉を残し、父との再会を夢に見る形となる。(“Farewell, Woodville, the turf will soon be green on my grave; and the violets will bloom on it. *There is my hope and my expectation; your's are in this world; may they be fulfilled.*” [67]) この意味では遺言に近い。一方で、『夢幻の原』では、すでに亡くなったマチルダがエリュシオンで＜私＞に身の上話を語る設定であるため、五月のある晩に牧場へ散歩に出かけたマチルダが気を失い、「私は家に運ばれ、その晩死んだ (I was carried home & died that night)」と言う (405)。そして、墓に芝が生えて堇の花が咲き誇る中、「今、父と一緒にではないが、叡智の教えを受けていつの日か父のもとへ行くことが叶えば、もう絶対にそばを離れることはないだろう」といった文言で締めくくられる (“Now the turf is

fresh on my grave and the violets are blooming on it – I am here not with my father but listening to lessons of Wisdom which will one day bring me to him when we shall never part” [405])。

#### 4. まとめ

このように2つの原稿を比較すると、『夢幻の原』における枠物語が『マチルダ』において取り払われて、自分の手記を綴るマチルダの語りに変更されてしまっている。これによって『夢幻の原』に記されていた善悪をめぐる教訓性が『マチルダ』において希薄になる。すでに触れたように、ゴドウィンが『マチルダ』における主人公の罪悪感や死への希求の念があまりに過剰であることに抵抗を感じ、読者にはそのような点に不快感を抱かせないためにも、前置きで主人公の罪の意識が過剰であることを言い含め、当世風の作家がみなしている罪というものも信用できないとする必要性があると言っている。もしゴドウィンの読んでいたのが『夢幻の原』であったならば、彼の批評はもう少し違ったものになっていただろうか。一方で、そうであったとしても、シェリーの『チェンチー族』への酷評や『夢幻の原』に描かれる父と娘の近親相姦のテーマなどの事情から、ゴドウィンが『夢幻の原』を積極的に出版した可能性は極めて少ないだろう。

\* 『マチルダ』の英語表記については *Mathilda* と *Matilda* のふたつが存在する。草稿原稿においてメアリは *Mathilda* のスペルを使用していたが、出版時にそのタイトルを *Matilda* としていた点を考慮して、後者の綴りを採用しているパメラ・クメミット (Pamela Clemit) 版に従うことにした。

## Notes

<sup>1</sup> E.g. Barbour 102-106; Garret 46-51. 例えば『マチルダ』の手記が、実際の life writing とは異なることを主張する批評家や『マチルダ』に演劇的特質を見出し「劇的テキスト」として解釈する批評家もいる (Gillingham 252; Bunnell 76)。

<sup>2</sup> See Garret 49.

<sup>3</sup> See Clemit 38. シェリーが1818年7月にプラトン (Plato) の『饗宴 (Symposium)』を翻訳しており、メアリは同年7月20日から8月6日に転記していたという記録がメアリの日誌にある (Journal 217-22)。

<sup>4</sup> See White 195.

<sup>5</sup> See Nitchie 453.

<sup>6</sup> See Miller 294.

## Works Cited

Barbour, Judith. "'The Meaning of the Tree': The Tale of Mirra in Mary Shelley's *Mathilda*" *Iconoclastic Departure: Mary Shelley after Frankenstein*. Ed. Snyder M. Conger, Frederick S. Frank, and Gregory O'dea. London: Associated UP, 1997. 98-114.

Bunnell, Charlene E. "*Mathilda*: Mary Shelley's Romantic Tragedy." *Keats-Shelley Journal* XLVI (1997): 75-96.

Clemit, Pamela. "*Frankenstein, Matilda, and the Legacies of Godwin and Wollstonecraft*" *The Cambridge Companion to Mary Shelley*. Ed. Esther Schor. Cambridge: Cambridge UP, 2003. 26-44.

Garrett, Margaret Davenport. "Writing and Re-writing Incest in Mary Shelley's *Mathilda*" *Keats-Shelley Journal* 45 (1996): 44-60.

Gillingham, Lauren. "Romancing Experience: The Seduction of Mary Shelley's *Mathilda*" *Studies in Romanticism* 42. 3 (2003): 251-69.

Gisborne, Maria. "The Journal of Maria Gisborne, 1820." *Maria Gisborne & Edward E. Williams: Shelley's Friends: Their Journals and Letters*. Ed. Frederick L. Jones. Norman: U of Oklahoma P, 1951. 19-50.

Miller, Kathleen A. "'The Remembrance Haunts Me Like a Crime': Narrative Control, the Dramatic, and the Female Gothic in Mary Wollstonecraft Shelley's

- Mathilda*" *Tulsa Studies in Women's Literature* 27.2 (2008): 291-308.
- Nitchie, Elizabeth. "Mary Shelley's *Mathilda*: An Unpublished Story and Its Biographical Significance" *Studies in Philology* 40.3 (1943): 447-62.
- Shelley, Mary. *Matilda*. *Mary Shelley's Literary Lives and Other Writings*. Ed. Pamela Clemit. Vol.4. London: Routledge, 2002. 1-67.
- . *The Fields of Fancy*. *Mary Shelley's Literary Lives and Other Writings*. Ed. Pamela Clemit. Vol.4. London: Routledge, 2002. 351-405.
- . "Note on *The Cenci*". *Mary Shelley's Literary Lives and Other Writings*. Ed. Pamela Clemit. Vol.2. London: Routledge, 2002. 282-86.
- . *The Journals of Mary Shelley 1814-1844*. Eds. Paula R. Feldman and Dianas Scott-Kilvert. Baltimore: Johns Hopkins UP, 1987.
- White, Newman Ivey. *Shelley*. Vol.2. New York: Octagon, 1972.